

高尾山報

令和7年9月号

夕闇に燃え上がる炎へ世の平穏を願い祈りが捧げられる



佐藤貫首と二人の新発意

澄みわたる朝の空気に秋の気配が漂う早朝の葉王院大本堂に於いて、佐藤貫首戒師のもと、新たに仏門に入り僧侶となるための得度式が執り行われました。得度者は東京多摩教区・阿彌陀寺住職・梅澤順峰法資・梅澤典永さん（二十一歳・写真左）と、山梨教区・放光寺住職・清雲俊雄法資・清雲俊心さん（十歳・写真右）です。

今回戒律（十善戒）を授けられ、新たに仏門に入られる新発意の、今後様々な修行での精進を願うものであります。

得度式厳修

八月二十一日（木）

五十三次の由来であるかは別にして、この善財童子の話は東海道に重ねてみると「東海道の道」の修行程と捉えることができる。五十三次の「次」という漢字には「宿場」の他にも「継ぐ」（続く）という意味があります。次から次へと歩を進めることにより、心の階梯（段階）も上がっていくものなのかもしれません。

さきほどの西行法師も、東国への旅の途中、東海道の見附宿（現在の静岡県磐田市）近くを流れる天竜川を渡ろうとして、次のような出来事を経験しています。

天竜川の渡し（渡し場）で船に乗ったところ、大人数が乗船していたために沈みそうになりました。先に乗り込んだあつた坊主が「後から来たあつた坊主は下りろ下りろ」と怒鳴ります。西行は「渡し場での争い事はつきもの」と思いつづかないふり

をしていると、武士は情け容赦なく馬の鞭で西行を打ちのめしたのでした。西行は頭から血が出て痛ましい姿となりましたが、少しも恨む様子なく、胸の前で手を合わせながら船を下ります。そして側にいた供の僧に向かつて静かに語りました。「仏さまのお心は、まず慈悲（情け深い心）を優先して、私たちのような者をお救いください。だから私を仇で返そうとすれば、その恨みは絶えることがない。『忍の心で敵に向き合えば、仇はすぐに消え失せる』と言われる。どんな時にも利他（他人の幸福を願うこと）を心がけるのが仏道修行の姿なのだ」と。

（『西行物語』）

「目には目を、歯には歯を」という言い方がありますが、西行はそれとは真逆の言葉を投げかけました。同じような仕返しをするのではなく「忍」の一字で立ち向かう生き方を教える論しています。

仏教では、あらゆる苦しみを堪え忍び、怒りの気持ちを起さないと「忍辱」と呼びます。『六波羅蜜』（「悟り」（理想）の境地に至るための六種の修行法）の一つに挙げられている「忍辱行」は、平常心を保ち、慈悲心を育む行いとして重んじられてきました。西行はこの教えを、身をもって実践したのでしよう。

忍辱衣を身に着れば戒香涼しく身に匂ひ

（『梁塵秘抄』）

「堪える心を身にまとい、ば、芳しい香りが備わっていく」

「旅は道連れ、世は情け」。「忍」とは、堪える心でもあり、相手を認め許す行為でもあるのでしよう。こんな時こそ「堪忍袋」の緒を締めて、清らかで深みのある「忍辱色」に心を染め上げていくのだと思います。

（栃木北部教区普濟寺）

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(159)

露下り天高くして
秋気清し
（杜甫「夜」）
（露が降りて、秋の気が澄み渡っている）
詩聖と呼ばれた杜甫（七一二〜七七〇）の漢詩の一節です。清々しい秋の空気に包まれながら、高い空から降りてきたかのような露が辺り一面にきらめいている様子が歌われています。

二十四節気の白露（今年は九月七日）を迎えて、潤いのある大地に実る野菜や果物、しなやかに頭を垂れる稲の穂にも新しい季節の訪れを実感します。日本列島はまだまだ残暑厳しい中ですが、僅かながらに夏と秋の入れ替わりを告げる風が吹きたたり、大空には秋の雲が高く浮かんでいるでしょうか。昔から、

もののあはれは秋こそまされ
（『徒然草』第十九段）
（心に深く沁み入る風情は、秋がとりわけ増えている）
と言われます。駆け足で過ぎ去っていく秋を惜しみながら、できるだけ多くの秋色に気づいていくたらしめたいです。

清見潟
月澄む空の
浮雲は
富士の高嶺の
煙なりけり
（西行「山家集」）
（清見潟では月の光が清らかに冴え渡っている。空に浮かぶ雲のように見えたのは、富士の高嶺に棚引いている噴煙であったよ）
この歌は、先月号でも取り上げた西行法師（一一一八〜一二九〇）が、「清

見潟」（静岡市清水区興津にある清見寺付近の海岸）での秋景色を詠ったものです。「清見」という地名の通りに、空には澄み切った月が輝いていたのでしよう。南には三保の松原、北東の角に富士山を望む東海道の景勝地で、西行はしばし旅の疲れを癒していたのかもしれない。

この興津宿を含む東海道は、江戸（日本橋）から京都（三条大橋）までの距離が約四九二キロメートルあります。現代であれば最速の新幹線「のぞみ」で二時間余りの行程ですが、かつては徒歩で半月ほどかかる長旅でした（ちなみに飛脚は、三・四日で踏破したそうです）。「東海道三大難所」（箱根・鈴鹿・薩埵）と呼ばれる険しい峠もあり、道中には旅人の宿泊地としての「宿場」が整備されました。

ご存知のように、東海道には五十三の宿場があります（さらに京都から

大阪間の四宿を加えて五十七宿とも言われます）。途中には名所旧跡や風光明媚な場所が多いことから、歌川広重（一七九七〜一八五八）『東海道五十三次』を始めとする浮世絵や、和歌・俳句といった文芸作品の題材としても取り上げられてきました。

ところで、なぜ「五十三」という宿場の数が決まったのでしょうか。その理由の一つとして語られているのが、『華嚴經』というお経に登場する善財童子の話です。



秋の風を感じ実りの秋を迎える

それによれば、修行者の理想とされる善財童子は、発心（仏道修行を行おうとする心）を起して文殊菩薩の教えを受け、それから五十三人の善知識（仏の道へと導く指導者）のもとを訪ね歩いて教えを乞い、ついに修行を完成させたそうです。それら五十三人の中には、僧侶や長者、童子や遊女など、あらゆる階層の人々がいたことが説かれています。

蟬の声が鳴り響く夏の盛り、約四十名のお子様にご参加頂いて、「高尾山子供やまぶし修行体験会」が開催されました。

山麓の不動院にて保護者の方々と別れた子供たちは、先達の山伏と共に琵琶滝水行道場を目指して出発しました。滝行では滝に打たれながら山伏から「お友達と仲良くできますか?」といった御本尊様とのお約束の問いかけを受け、元気いっぱい「はい!」と答える姿が見られました。

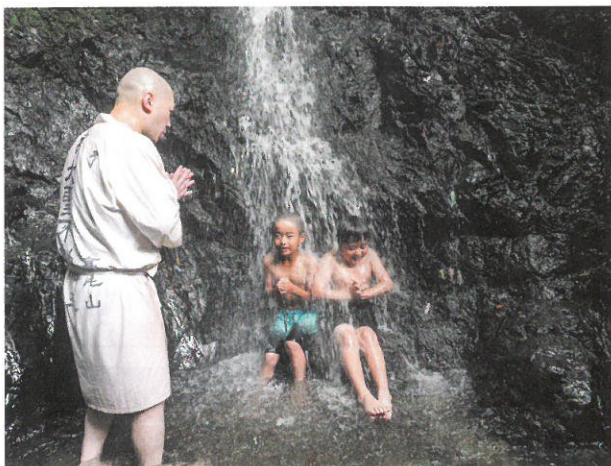
滝行を終えると緊張もほぐれたのか、子供たちは自然と会話を交わすようになり、険しい山道も元気に登っていきました。薬王院へ到着後は、大本坊にて精進カレーライスの昼食を頂きました。

午後は腕輪念珠の製作体験を行い、それぞれが思い思いの色や大きさを選んで、世界に一つだけの念珠が完成しました。その後、大本堂にて当山貫首導師のもと厳かに執り行われた御護摩修行にて、完成した腕輪念珠をお加持して頂きました。

不動院での閉会式では、参加者全員で本日の修行の成果を今後の生活に活かすことを誓い、「誓いの言葉」を御本尊・飯縄大権現様へ奉告しました。最後に保護者の方々が見守る中、修行を終えた証として「修了証」が一人ひとりに授与されました。修行を通じて仲良くなった友人たちとの別れを惜しみつつ、子供たちはそれぞれの家へと帰路につきました。

高尾山子供やまぶし修行体験会

八月三日(日)



琵琶滝での滝行



佐藤貫首と記念撮影

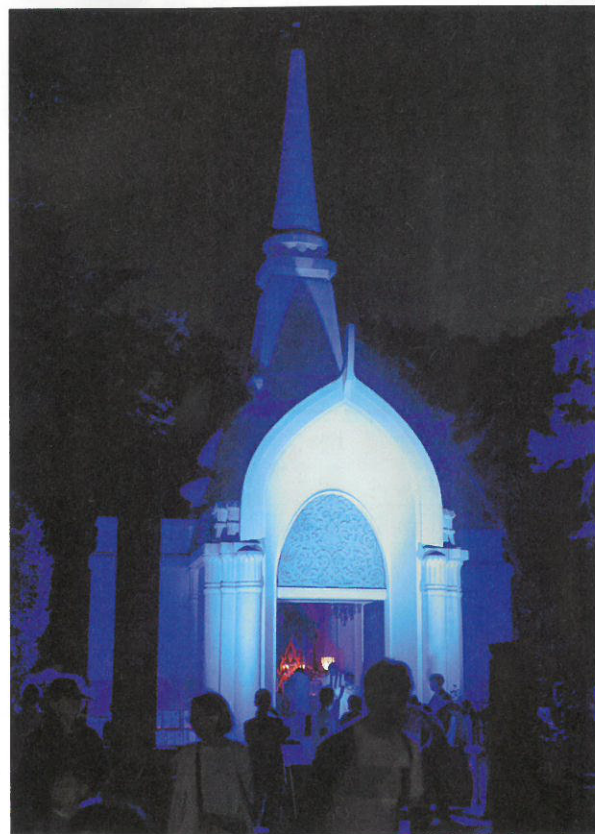


オリジナル腕輪念珠を作成中

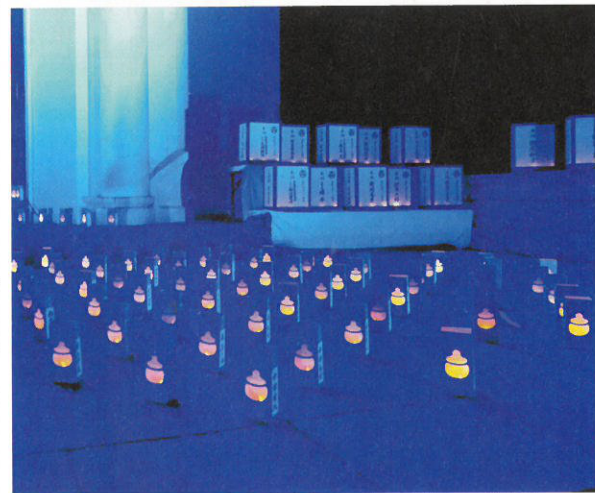


元気良く険しい山道を登る

人々の願いが世界を照らす 夏の高尾山「灯りの巡礼」 清涼体感めぐり



世の平穏と幸福を願い仏舎利塔が青く輝く



御信徒様より奉納頂いた紙燈籠が並ぶ

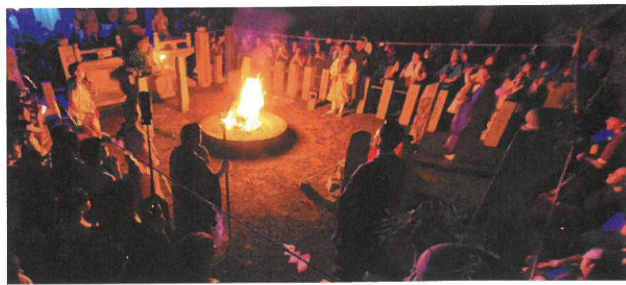
日本の文化と自然を満喫する『夏の高尾山 清涼体感めぐり』が、七月十九日から八月三十一日まで開催されました。八月二十三日には「灯りの巡礼」が行われ、佐藤貫首導師のもと柴燈大護摩供が厳修されました。そして、世界平和や災害被災地復興、並びに御信徒の皆様の身上安全、身体健全など諸願成就をご祈念申し上げました。

世の平穏を願い、世界に希望の光を届けるため、幸福と平和の象徴の色である青の光に包まれた「ブルーライトアップ」により、仏舎利塔は神秘的に輝いておりました。その周囲には、御信徒様より御奉納いただいた諸願成就の祈りを込めた数多の紙燈籠が並び、柔らかな灯りが暗闇を照らし出しておりました。大勢の参列者はその青と燈火の光を静かに見つめ、それぞれの祈りを胸に捧げておりました。

また、参道では春日燈籠に火が灯され、普段目にする薬王院の光景とは異なる幻想的な光景に行き交う参拝の皆様は見入っておりました。



春日燈籠が夕闇に浮かぶ



佐藤貫首導師のもと柴燈大護摩供が厳修された

観音菩薩の宗教

93

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音（その31）

観音菩薩の有する女性性、さらには女性を惹きつける魅力は、この尊格の大きな特色である。なかでも観心寺の如意輪観音の女性的な身体と相貌、多くの女性信者の存在はその典型であるが、その他にも観音菩薩の變成男子の思想、百済観音のたおやかな身体、狩野芳崖の悲母観音などを挙げる事ができる。かかる観音菩薩の属性を説明するには、仏教の有する女性観や男女平等の思想を考察しなければならぬ。その意図に基づき、これまで筆者はブツダが女性の出家に門戸を開いていたこと、しかしブツダ入滅後の部派仏教時代に『八敬法』などの「女性差別」

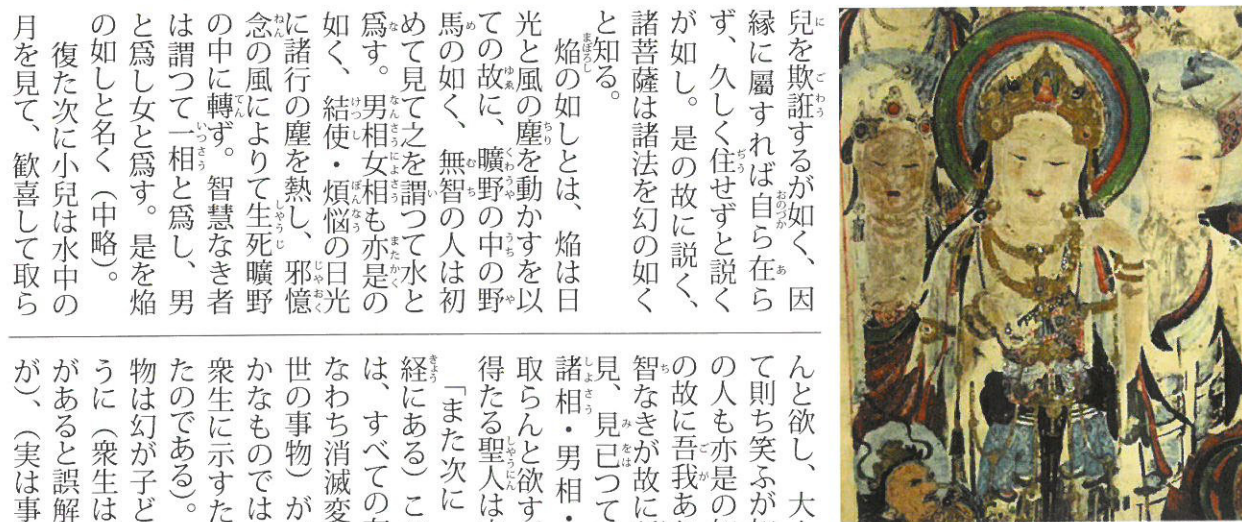
的制度が発生したことを述べてきた（『観音菩薩の宗教』92）。今号では大乘仏教に至り、再びブツダの男女平等思想に回帰したことを見ていきたい。

そもそも大乘仏教では生物学的な性差や、今日いうところのジェンダーをどのように捉えてきたのだろうか。性差も他の「現象世界」と同様と捉えれば、この設問の答えは明白である。大乘仏教ではあらゆる事物を因縁所生と説いているからである。となれば性差も実体的なものではなく、それに囚われることも煩惱と説く。このことは、大乘の空の説を詳述した『大智度論』に明示されている。以下、該

当する箇所の原文と書き下しおよび現代語訳を示す。

「復次是幻譬喩。示衆生一切有爲法空不堅固。如說一切諸行如幻欺誑小兒。屬因縁不自在不久住。是故說諸菩薩知諸法如幻。」

如焰。焰以日光風動塵故。曠野中見如野馬。無智人初見謂之爲水。男相女相亦如是。結使煩惱日光、熱諸行塵、邪憶念風、生死曠野中轉。無智慧者謂爲一相、爲男、爲女。是名如炎（中略）。復次如小兒見水中月歡喜欲取。大人見之則笑。無智人亦如是。身見故見有吾我。無實智故見種種法。見已歡喜欲取諸相男相女相等。諸得道聖人笑之。『大智度論』卷第六（大正藏、第二五卷、一〇二頁a-b）



燉煌莫高窟の57窟に描かれた「美人」と評される観音像
<https://www.zjlib.cn/zjlibzl/52583.htm>

兒を欺誑するが如く、因縁に屬すれば自ら任らず、久しく住せずと説くが如し。是の故に説く、諸菩薩は諸法を幻の如くを知る。

焰の如しとは、焰は日光と風の塵を動かすを以ての故に、曠野の中の野馬の如く、無智の人は初めて見て之を謂つて水と爲す。男相女相も亦是の如く、結使・煩惱の日光に諸行の塵を熱し、邪憶念の風によりて生死曠野の中に轉ず。智慧なき者は謂つて一相と爲し、男と爲し女と爲す。是を焰の如しと名く（中略）。

復た次に小兒は水中の月を見て、歡喜して取ら

によつて現れるのだから、実体はなく、いつまでも同じ状態ではないと説いている。そのため（経文は）諸菩薩はすべての事物は幻のようであると説くのである

（大品般若經にある）『焰の如し』と（いう喩えが示すこと）は、日光と風が塵を動かすことによつて曠野では野馬のよう（見えるが）、智慧のない人が初めて見るとそれを水と（誤解して）見る。男性としての相も女性としての相もこれと同じように、煩惱の日光が諸行の塵を熱することにより、また邪な憶念の風によつて（衆生が輪廻転生する）曠野のなかで転じて（あらわれてくるものである）。智慧の無いものはこのことについて（男女は）ひとつの固定したあらわれと見てしまい、『これは男だ』『これは女だ』と決めつけてしまふ。このことをもつて焰の如しと名付けるのである（中略）

また次に小兒は水中に月が（映っているのを）見て、喜んでそれを取ろうとするが、大人はそれを見て笑うように、無智の人も同様である。身体（を）実体的なものと思ひ込む）考えによつて自分という我があると見てしまふ。また真実の智慧がないために種々の物事を見ては、それを見終つたあとに喜んで、あらゆる（この世に）あらわれ（たもの）や、男性としての相や女性としての相を（実体的なものとして）捉えようとする。しかしさとりを得た聖人はこれを見て笑う」

上記の引用に関し、若干の解説を加えよう。『大智度論』はインドの龍樹（Nāgārjuna）が『摩訶般若波羅蜜經』に加えた注釈書とされるが、鳩摩羅什の漢訳のみが伝わり、書誌学的には不明な点も多い。とはいえ、般若思想や空の理解には不可欠で漢文仏教圏に大きな影響を及ぼした。元来、注

釈文献であるため、上述のように経文の語義を解説し、独自の見解を述べるという体裁を取っている。

「一切諸行如幻」の「幻」は原語が^{मया}と推定でき、すべての「現象」に実体のないことの喩えとして用いた語である。次の「如焰」も同様で、事物の非実体性を喩えている。「焰」は、山上曹源訳（『国譯大藏經』論部第一卷、國民文庫刊行會、一九一九年、二二二頁）では「ほのほ」とルビが振られているが、それでは文意に齟齬をきたすので、ここでは文脈から原語を^{hatic}（陽炎）と推定して「かげろう」とした。野馬は野馬泉ともい、オアシスの泉の意である。焰の語も幻同様、すべての現象に実体のないことを表している。この世の現れには男性として生まれることや女性として生まれることも含まれるので、男女の性差もまた因縁所生であり、焰

として喩えられる。しかし凡夫はそれらを実体的なものとして捉え、煩惱に陥つてしまふ。次の小兒の喩えも同じく、凡夫は自分の身体を絶対的なものと信じて疑わないように、男女のあらわれも実体的に捉えて執着すると説いている。

『大智度論』の所説を要約すれば、男も女も因縁によつて生じたもので固定的本質を持たない。にもかかわらず、性差を実体として見るのは空の智慧から見れば無智であるとする。この思想は、比丘尼は比丘より下位に置かれるとする『八敬法』や、女人は如来になれないとする「三從五障」などのような「女性差別」の説に対する強力な批判的契機を与えたと見てよい。そのことが当初は男性的菩薩であった観音菩薩が密教にいたる経緯の中で女性化する思想的背景になっていった。さらには『法華經』などの大乘経

典の女性観の後押しもあつて、日本における女性的な如意輪観音や、それに対する女性参拝者の輩出をもたらしした。詳しくは次号に譲るが、性差を因縁所生とする空観の思想から観音菩薩の女性化に至る流れを略述しておこう。『大智度論』が男相女相は焰の如しとして性差に実体なしとした思想は、『法華經』「提婆達多品」の「龍女成佛」のごとき女人成佛の思想の基礎となり展開していく。さらに同経「普門品」では観音は自在に男女の姿を取ると説かれ、初唐（七、八世紀）の燉煌莫高窟五十七窟、通称「美人窟」に見られる壁画のように女性的な観音像（白衣観音か）が制作されるようになった。こうした思想や造像は日本にも齎され、やがて密教が普及すると一層女性的な如意輪観音像が現れ、同時に多くの女性信者を惹きつけるに至った。

飯縄山火まつり

八月十日(日) 於・信州飯縄山麓

信州・飯縄山麓、大座法師池のほとりに、静かに夜の帳が下りる頃、「飯縄火まつり」が執り行われ、佐藤貫首大祇師のもと、柴燈大護摩供が厳修されました。

例年は山頂の飯縄神社奥社まで登拝し、御神火を頂きますが、本年は悪天候のため、登山道入口「二の鳥居」前で採火式を行い道場へ御神火を運びました。宵闇迫る中法要が始まると、カンテラより点火された御神火が道場内を煌々と照らす柴燈護摩の炎となつて立ち上り、僧侶と共に参列者はお山への感謝を捧げると共に、家内安全・五穀豊穡・無病息災など、諸願成就を祈念いたしました。



道場内を照らす祈りの炎

いけばなの心 66

華道教授 佐藤 宗明

まだまだ厳しい残暑が続いておりますが、道端や庭先に生い茂る草木、そして生花店に並ぶお花の顔ぶれからは、少しずつ秋の訪れを感じられるようになってきました。日中の暑さは相変わらずですが、朝夕の空気が、植物たちが見せる色合いや姿には、どこか穏やかで落ち着いた秋の気配が漂っています。

今回は、生花正風体の中でも「交生」という生け方で仕上げた作品をご紹介します。「交生」とは、秋の季節によく用いられる生け方で、二種類の花材をバランスよく整えて生けていきます。特に、あまり力強くはない秋草同士を組み合わせて、それぞれが足りない部分を補い合い、調和させるのが特徴です。

今回の作品では、ヨウシュヤマゴボウと桔梗という、どちらも秋の風情をよく表す花材を用いてみました。ヨウシュヤマゴボウの自由で動きのある姿と、桔梗の凛とした佇まいを活かしながら、秋草が風に揺れる草原の



花材：ヨウシュヤマゴボウ・桔梗

恩師・菊地正先生に学ぶ(12) 創作書おろし「八王子空襲擬人化物語」 御賓頭盧様と とんとん地藏尊様

八王子市 石井忠明

とんとんむかし

高尾山葉王院への参道の登り口に不動院と云うお堂があるのを御存じかな。かつてその玄関の脇に、つこりとしたお顔の「お賓頭盧様」が鎮座しておったのじゃよ。

少々難しい話になるのじゃが、お賓頭盧様はな「不動の意」の梵語(サンسكريット語)の意識でな、羅漢様の一人と言われている。そしてな、頭の髪は白く眉毛が長いんじや。そのお賓頭盧様の、自分の痛い所と同じ場所を撫ぜると、すぐに治るといふことじゃ。

今、玄関前には「なでなで地藏尊様」が鎮座しておつてな、お賓頭盧様は不動院の床の間にお祀りされておるわ。お賓頭盧様は

な、何千人という人から手足や頭、それに身体を撫ぜられ、永年の風雨に曝されてやせ細つてしまつてな、銅製のお地藏様にバトンタッチしたというわけじゃ。ところてな、ある丑三時(夜中)のことじゃつた。不動院の中のお賓頭盧様がお地藏様に話しかけて来た。

なでなで地藏様よ、近頃私は毎晩のように私の若い頃の夢を見るのだよ、それはな、子供達を中心になつて私を大八車に乗せてな、車の周りをよききれいな布の切れ端や色紙等で飾り付けてな、撫ぜれば痛い所治る、お賓頭盧様。

と皆で唄いながら村々を歩き回つとるのさあ、村の衆はよ、唄声が聞こえて

くると待つていましたとばかりに、私の所へ駆け寄り頭や背中、腰を撫ぜた後で手を合わせて賽銭を置いて。お米や野菜も置いてたなあ、そんな夢をちよこちよこみるのじゃよ。そこで、今一度そんな昔の姿を再現したいのだが、何か方法は無いのかう。

それを聞いたなでなで地藏様は、目の前でずつと立ちつばなしのまま本を読んでいるお地藏様にも話を聞いてみた、するとそのお地藏様はな、「よくぞ聞いてくれましたね」と涙ながらに言つた。

「私は十年以上前から立ちつばなしです。お参りの方や登山の方は私の前を通り過ぎるだけで、手を合わせる人はとても少ないのです。出来ればお賓頭盧様が願っている思いに参加できれば嬉しいのですが。」

なでなで地藏様は丑三時になるのを待ち兼ねてお賓頭盧様に話したと、

するととても喜んでな、夜になるとみんなが不動院に集まつてどうしたら人間達にわかつてもらえるか話あつたと。すると「氷川神社の神様に聞いてみよう」となつてな、聞いてみるとこんな意見を出してくれた。

それなら蕎麦屋の「おしん婆さん」がよからう、生まれも育ちも地元だからのお、此の辺りの昔話もよく知っている婆さんさあ。だがのお、おしん婆さんは十年前も前に百二歳で天国へ行つちまつたんだ。そうそう、おしん婆さんの生前に菊地何某という坊様が蕎麦屋に時々訪ねて来てな、婆さんからお賓頭盧様の話や近所の昔話を聞いていたつてよ。婆さんも「お賓頭盧祭り」を再現して欲しいと天国から願っているだろうよ。近頃じゃ下界に天国の婆さんからの願いが届いたのか、おしん婆さんの娘が昔話を伝承し始めています。何せおしん婆さんは初代伝承者で



とんとん地藏尊(左) なでなで地藏尊(中) お賓頭盧様(右)

とんとんむかしは
へえしまい

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

69

二十世岳純4 天保雜記

庶民文化の爛熟を見た
太平の文化文政が過ぎ、
天保（二八三〇〜四四）
の年号にはどこか重苦しい
雰囲気を感じる。『天保
雜記』という社会情勢
や政治向きについて記し
た書物が歴史資料として
あるが、ここではその高
尾山版として、この時期
の逸話を取り上げてみ
よう。

弘法大師千年忌

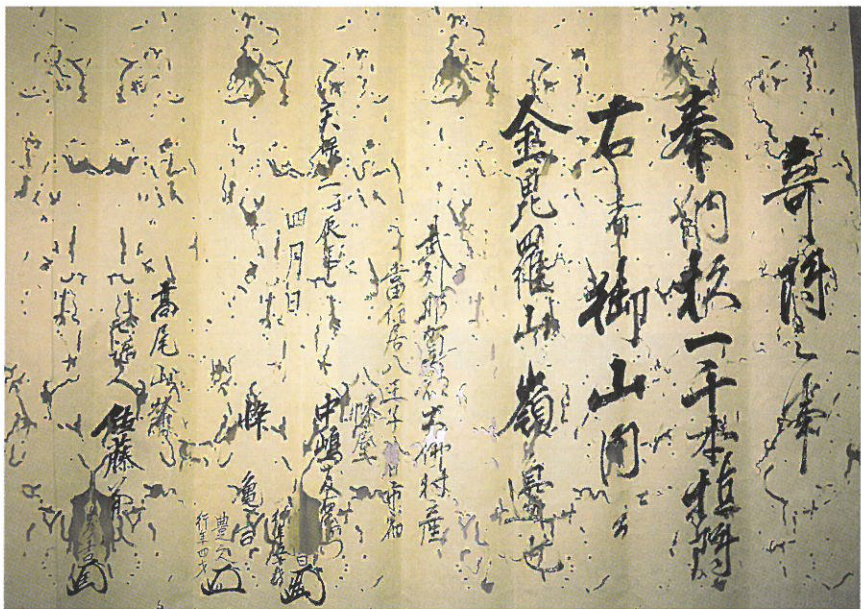
天保初年のトピックス
として、宗祖弘法大師空
海の千年忌があった。薬
王院文書には、来る甲午
年（天保五年）東寺にて
法要を執行するとの天保
二年一〇月一九日付仁孝
天皇綸旨の写し、十一月
二日付仁和寺・大覚寺
両門跡令旨の写し、それ

らを伝達する旨の東寺に
よる副状の写しが残る。
その以前の九百年忌関連
の史料では、門末の檀家
に至るまで寺に集めてそ
れらの書面の趣旨を拝聴
させ、報謝金を集めるよ
うにと指示がされている。
空海遠忌の法要は、五
〇年ごとに天皇の勅命に
よって執行されていた。
高尾山では毎年三月二
日の大師命日に御影供が
執行されており、天保五
年のそれは特別な法要で
あったが、残念ながらそ
の具体的な動静は伝わっ
ていない。ちなみに、千
二百年忌が今から九年後
ということになる。

杉苗寄進

その千年忌法要より前
になるが、天保三年四月

付の杉苗寄進状が残って
いる（写真）。大杉並木
と参道沿いに連なる杉苗
奉納者の名を記した奉納
板は、今日の高尾山にお
けるシンボリックな光景
の一つである。霊域の山
林を保全する寄進行為で
ある杉苗奉納について、
江戸後期におけるその具
体的な記録として希少な
書面には、杉を一千本金
比羅台の付近に植林する
とある。寛政七年（二七
九五）の紀行文『武野遊
草』には、参道脇の杉の
枝を折り取って挿し木に
する願掛けの習俗が記さ
れているが、杉苗の奉納
という信仰形態は、元を
たどるとこのような素朴
な行為に発するものなの
かもしれない。「金毘羅
山嶺辺」という表参道沿
いの具体的な地名が記さ
れているので、この時期
の杉苗寄進は植林そのま
まを意味していたようだ。
江戸期の年号をもつ寄進
状はこの一通なのだが、
別の記録にも杉の植林や
下枝払いの記事があるの



天保3年付の杉苗寄進状（法政大学多摩図書館寄託）

で、この時期に同様の寄
進行為のなされていたこ
とが十分推測される。

天保の飢饉

天保の記憶に影を落と
すのが飢饉である。同四
年は冷害により、東北・
関東で凶作となった。高

尾山最寄りの上栲田村旧
家の日記にも「この年十
一月米高値にて両に四斗
位」とし、高尾山の護摩
檀家でもあった八王子在
の富農が近隣に施米をお
こなった旨が記されている。
同七年三月九日には
上栲田村原宿で打ち毀し

が発生、江川太郎左衛
門代官所の手代齊藤勘
兵衛が取り調べのため出
張って来ている。日記の
主は五月晦日から八月ま
で雨が降り続き穀類が不
作となったことを「誠に
稀代の事に存じそうろ
う」と驚きをもって記し
ている。米価は九月の収
穫期にもかかわらず、早
くも四合（約六〇〇グラ
ム）一〇〇文というので、
よく言う蕎麦二杯一六文
を勘案しても、昨今の米
価高騰どころではない。

八月には甲斐国都留郡
（山梨県東部）に発し、
甲府を中心とする国中地
域一帯で約三〇〇軒が打
ち毀されるという大規模
な騒擾が発生した。世に
言う郡内騒動である。騒
擾は多摩方面にも波及し、
代官江川英龍が出張して
きている。後世英明で知
られることになる、着任
早々の若き代官の目にそ
の様相はどのようなに映
たであろうか。護摩供の
施主の名簿である『江戸
田舎日護摩講中元帳』の

檀家名には、使用過程に
おける抹消表示も目立つ。
「休」という文字も多く、
止むを得ない事情で護摩
料を止めるという意味だ
が、一村まるごとの抹消
などもあり、尋常な様子
とも思えない。検証の術
はないが、ひよつとする
とこの飢饉による困窮が
影響しているのかもしれ
ない。

天保の改革

天保八年には大坂で元
町奉行所与力の大塩平八
郎が騒乱を起こす。支配
側から反乱の首謀者が出
たことは幕府に衝撃を与
えた。同じ時期、異国船
の来訪も頻々と発生し、
アメリカ船が将軍のお膝
元である江戸湾口にまで
進入したという、この年
のモリソン号事件もまた
大きな衝撃であった。
内憂外患の時代、天保
二一年に大御所徳川家齊
が死去すると、老中主座
にあった水野忠邦が政治
の主導権を握り改革に着
手した。よく知られる株

仲間の解散は、特権商人
による市場の寡占を否定
し、自由競争を促しての
物価引き下げを意図する
ものだった。奢侈禁令は
世情困窮の折柄、倫理
的な意味合いもあっただ
ろうが、人々の浪費を戒
めるため服飾、飲食、芸能
出版などに制限が加えら
れた。さらには年貢徴収
を厳格化して財政基盤の
強化を試みた。

しかしながら、都市へ
の人口流入を防ぐ人返し
令や江戸・大坂周辺の私
領を幕府領に編入しよう
とした上知令など、強引
で経済の現実を顧みない
政策の数々は不平不満を
嵩じさせ、改革は順調な
進捗を見せず、離反者も
出て水野の失脚に至った。

山田早苗の紀行

ちょうどこの頃、江戸
赤坂で質商を営む狂歌師
山田早苗が『玉川源流日
記』（天保二年）の中に
「高尾山詣」という一文を
遺している。山田は多摩
川の源流域をたどる旅行

の途次、表参道（二号路）
に登り、薬師堂、飯縄
権現社を参拝している。
記事は炊谷と琵琶滝に
も及ぶが、「御社より下
る程」という帰路に金比
羅台の景観を愛でている
ので、実際に立ち寄った
のかは不明である。

この旅程とともに「高
尾山縁起」が立項されて
おり、典拠は定かでないも
の、本連載の第二・二回
に紹介した寛延二年（一
七四九）の縁起の内容を
忠実になぞった俊源によ
る中興を記す前段に加え
寛延の縁起にはない高尾
山の霊験を書き連ねてお
り興味深い。「亥の日」と
「巳の日」に供物を供え
ると、浄信の人を扶助し
不信の輩を罰する利益の
あること。木の間に万年
水を湛えた一本の大杉が
あること。琵琶滝の絹布
を裂くような響き。日
照りにも潤れない独鈷の
井戸。神使の霊鳥であ
る仏法僧の生息。盗賊が
山中に逃げ込むと自然と
早鐘が鳴ること。マムシ

が人を害することのない
こと。伝聞を書き記した
ものだろうが、当時の
人々が高尾山をどのよう
に認識していたかの一端が
知れる一文である。
註1 中興伝承に異人が
飯縄権現像を彫ったとさ
れている場所。
註2 暦には一日ごと十
二支が割り当てられてい
る。用例に、稲荷祭礼の
初午、土用の丑の日など。
註3 琵琶滝の音を白居易
の漢詩「琵琶行」にあ
る「四絃一声如裂帛」に
なぞらえている。
註4 中興開山の俊源が
水を得たとされる山中の
霊泉。明治になり崖崩れ
で埋没したと言う。
《参考文献》稲葉松三郎・
滝沢博校訂『玉川源流
日記』（慶友社、一九七
〇）、藤田覚『天保の改
革』（吉川弘文館、一九
八九）
おことわり 本連載では
史料の引用について、適宜、
読みやすく原文に手を加
えています。

一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

四十四段 流言飛語に惑わされない

根拠のないうわさは、実際に事実を見聞きしたものではありません。人から人へと伝わるうちに内容が歪んでしまう可能性があります。だからこそ、「百聞は一見に如かず」という言葉のように、自分の目で確かめることが大切です。

『高尾山健康登山の証』のお勧め
年間約三百万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々に参加されており、今では期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますと、健康登山者限定の記念品と交換できます。



帳面……………七百円
スタンプ……………百円

高尾山 季節散歩

和風月名

色取月

「いろどりづき」

旧暦九月は現在の十月中旬、十月上旬頃に当たするため、広葉樹が色づく時期となります。木の葉だけでなく、様々な花が咲き、果物が実る季節となるので、まさに様々な色彩に「彩られた」月と言えるでしょう。

今月の風物詩

稲刈り

日本の美称に「豊葦原の瑞穂の国」というものがあります。自然豊かで稲が実る美しい国という意味です。稲刈りはその瑞穂、すなわち実った稲を収穫する、大切な営みとなります。古くから日本人は、稲を神聖な恵みと考え、感謝の心を込めて稲刈りを行ってきました。

おはなし散歩道

おひるねかいぞくせん

柏市 木村 研

「あつい あつい」

こんなに暑くちやお昼寝なんかしてられない。

ともちゃんは、布団をはねのけ、とつとつとつと外にとびだした。

空には雲ひとつない空い空が広がっていた。

頭の上では、おひさまがギラギラ照りつけている。暑いはずだ。

ともちゃんは、頭にきた。「こら雲。おまえ達がお昼寝してるからじゃない。早く出ておいで」

空に向かってさけぶと、小さな雲がおりてきて、はだかの男の子がいった。「ごめんね。雲たちが、暑いからいやだっていうんだ」

「いやだって?」
「うん。みんな、黒ひげ船長の海賊船にのって、酒盛りしてるんだ」

と、男の子は申し訳なき

そうにいった。

「酒盛り?」

なんだかよくわからなかったけど、ともちゃんは、男の子の雲に飛び乗って、「そこに、連れてって」と、いった。

男の子の雲は、ともちゃんをのせてぐんぐん空にのぼっていった。すると、遠くの方に黒い入道雲の海賊船がいた。

男の子の雲が、黒い海賊船に飛び込むと、中は真つ暗だった。

ともちゃんが、「くろひげ船長。暑くてたまらないから、早く雨を降らせて」と、いった。

すると、ひげもじやの黒ひげ船長が、「なに。わしに命令するつもりか」と、怖い顔でにらんだ。

「だって、入道雲が出てこない」と、男の子がいうと、船長は、「子供達が、みんな酔っぱらっているんだ。じゃあ。お前たちが、海賊船を動かすのを手伝ってくれるか?」

と、いった。

「いいよ」

ともちゃんと男の子、黒い海賊船に飛び乗った。

「よし。帆をあげろ」と、船長がいった。

ともちゃんと男の子がロープをひっぱると、帆が上がって黒い海賊船がゆっくり動き出した。

すると、海賊船は、むくむく大きくなって、空いっぱいひろがっていった。

「後は、僕にまかせて」

男の子が、雲の中から太鼓をとりだして、どんどんどんど叩き始めた。

「わあ。君は、カミナリさんだったの?」

ともちゃんが目をまるくしている、

「そうだよ。今日は、お

ないと雨が降らないから、みんなとても困ってるんだよ」

と、ともちゃんがいうと、船長は、

「子供達が、みんな酔っぱらっているんだ。じゃあ。お前たちが、海賊船を動かすのを手伝って

くれるか?」

と、いった。

「いいよ」

ともちゃんと男の子、黒い海賊船に飛び乗った。

「よし。帆をあげろ」と、船長がいった。

ともちゃんと男の子がロープをひっぱると、帆が上がって黒い海賊船がゆっくり動き出した。

すると、海賊船は、むくむく大きくなって、空いっぱいひろがっていった。

「後は、僕にまかせて」

男の子が、雲の中から太鼓をとりだして、どんどんどんど叩き始めた。

「わあ。君は、カミナリさんだったの?」

ともちゃんが目をまるくしている、

「そうだよ。今日は、お

父さんがお出かけしてるから、ぼくが雨を降らせ

るんだ」

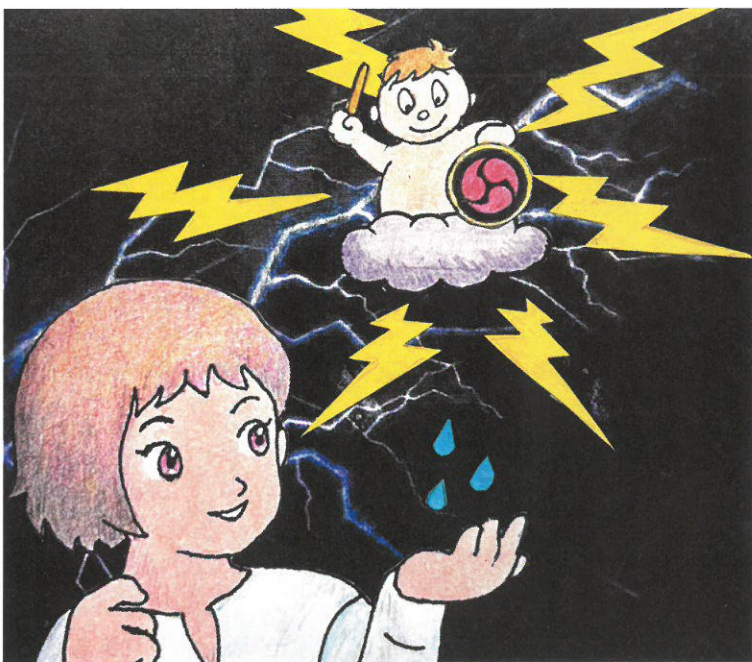
と、男の子がいった。

すると、黒い雲が、空いっぱい広がって、カミナリがピカッと光った。

そして、いきなり雨が降りだした。

「わあ。ありがとう」

ともちゃんは、大喜びで家に帰っていった。



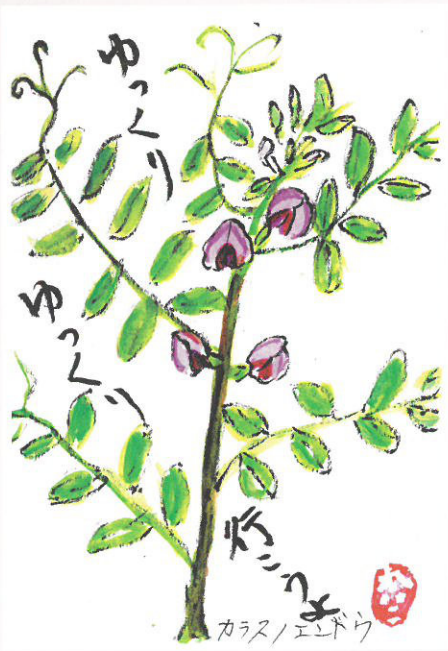
「おお、ともちゃんか。どこに行ってたんだ。雨が降ったから、これで涼しくなるぞ。どれ、もうひと眠りしようか」
と、おじいちゃんが、うれしそうにいった。
「そうだね」
ともちゃんは、大きなあくびをした。
(おわり)
(挿し絵・小出 茂)

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙

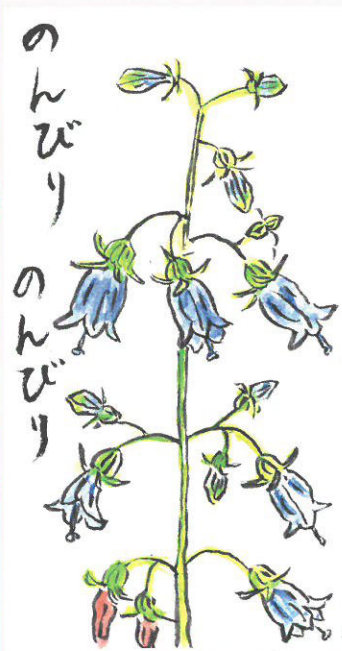
八王子市 栃谷 玲子

「ゆっくりゆっくり」



「風にゆられて」

風にゆられて



中興開山六百五十年記念

特別御朱印授与の御案内



特別御朱印

授与期間 年内予定
授与所 御護摩受付所
授与料 2,000円

本年は中興開山の祖である俊源大徳が高尾山を再興された
永和年間より数えて、六百五十年という大きな節目に当たり
ます。この勝縁を記念して御護摩受付所において「特別御朱
印」を授与しております。
この御朱印は御本尊飯縄大権現様と、高尾山を中興された
俊源大徳をモチーフとした、力強い切絵が施されております。
御来山の折にぜひお求め下さい。

日程表

一日目	二日目
10:00 高尾山麓不動院 集合・受付	2:45 起床
10:30 開会式	3:30 出立
11:00 昼食	3:40 神変堂法衆
11:30 出立	3:45 回峰行
12:00 滝行	4:45 山頂法衆
14:00 回峰行	5:30 朝勤行
16:30 かしき谷にて法衆	6:00 朝作務
17:00 坊入	7:00 朝食
17:30 入浴	8:00 諸堂参拝
18:30 夕食	9:45 法話
20:00 就寝	10:45 昼食
	11:45 柴燈大護摩
	13:30 閉会式 高尾山麓不動院
	14:00 解散

【信徒峰中修行会】を、十月十一日から十二日まで
二日にかけて開催致します。
高尾山に広がる大自然全体を道場として、御本尊・
飯縄大権現様に身を任せ、一心に修行してみたいかが
でしょうか。滝行や夜明け前に行われる回峰行、また
法話や有喜苑での柴燈大
護摩供等を行います。
回峰行では、舗装され
ていない暗い山道を一定の
ペースで歩きますので、体
力に自信のある方のみ御
参加下さい。
※申込締切後、詳細を
示した要綱をお送り
します。



第二百二十五回 信徒峰中修行会 十月十一日(土)〜十月十二日(日)

申込期間 九月十九日(金)まで
参加費 二万五千元
*保険料含
定員 四十人
*二十歳以上
定員となり次第締め
切ります。ホームページ
でご確認下さい。
集合 高尾山麓不動院
服装 運動着
運動靴(登山靴可)
持参品
*ヘッドライト
弁当
(初日昼食分)
軽食
(二日目未明分)
雨具
(カッパ・ポンチョ)
洗面用具、タオル
寝間着、筆記用具
リュックサック
*お持ちの方は、念
珠や錫杖をご持参
下さい。

お申し込みについて

左記のいずれかの方法でお申し込み下さい。

- ① ハガキに必要事項【郵便番号・住所・氏名とふりがな・年齢・性別・生年月日・当日連絡のつく携帯電話番号・緊急連絡先(電話番号・名前・続柄)・アレルギーの有無】を明記してお送り下さい。
- ② QRコードからお申し込み下さい。

●お車でお越しの際には山麓祈禱殿駐車場をご利用下さい。お問合わせのある方は時間内(九時〜十六時迄)に信徒峰中修行会係までご連絡下さい。



西国四十九薬師霊場巡礼(8)

厚木市 荒井 一雄

秋遊深雪山醍醐寺

上下醍醐堂醫王

感情移入閑静涼

聖宝探求霊泉湧

渡歩林中拜祖堂

秋風吹く

笠取山ゆ眺むれば

遠き谷間の林道も見ゆ

秋、深雪山醍醐寺に遊ぶ

上醍醐も下醍醐も共に医王(薬師)堂は
国宝なれど何故かさりげなく
ひっそりと建つ…

汗びっしょりの登拝達成感は
徐々に関静なる涼しさへと移る…

空海様の孫弟子・理源大師
聖宝様は山中に修行の聖地を
探すと霊泉(醍醐水)の
湧くを発見す…

大森林を歩き開山堂を拝す…

七五三身上安全祈願



「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これ
から健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の
願いを込めて寺社にお参りするという行事です。
高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を
願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れておりま
す。十月〜十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、
「七五三祝い子育て祈禱」を受け付けております。
どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申
し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想
されますので、時間に余裕を持って早めの御来山
をお勧めしております。

薬王院インスタグラム紹介

薬王院では、インスタグラムを用いて各種
行事や四季が移ろいゆく風景を、写真や動画
で御信徒様にお届けしております。
これからの様々な写真や動画を沢山アップ
してまいりますので是非ともフォローをお願い
致します。

下記のQRコードか
URLから
検索ができます。



TAKAOSAN_YAKUOIN

instagram.com/takaosan_yakuoin/



登山だより

十月行事日程

- 一日〜七日 聖天秘供(聖天堂)
- 三日、十五日、二十七日 弁天秘供
- 三日 高尾山内八十八大師巡拝
- 四日 中興俊源大徳忌
- 七日、二十日 御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)
- 八日 仏舍利詣り(仏舍利塔)
- 十一日〜十二日 信徒峰中修行会
- 十七日 中興開山六百五十年記念
高尾山秋季大祭

二十一日

飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

二十五日

月例写経会

(十三時山麓不動院)

二十六日

高尾山とんとんむかし
「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

二十八日

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

三十一日

滝じまい



毎日の お護摩奉修時間

午前9時30分
" 11時00分

午後0時30分
" 2時00分
" 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。

高尾山の昆虫

マツシタトラカミキリ

191

昔、京浜昆虫同好会
が刊行した「昆虫採集
案内」という本があり、
当時私のバイブル的存
在でした。

北海道から沖縄の離
島まで採集ポイントが
詳しく紹介されている

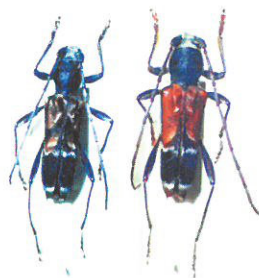
中、関東エリアでは勿論高尾山が入っていて、興味
深く何回も読んだことを思い出します。

甲虫では、この頃はヒラヤマコブハナカミキリ
が大珍品であり、シーズンになると多数のカミキ
リ屋さんたちが集まりました。

私は文中にあったマツシタトラカミキリに関心
を持ち、網を持って出かけたのですが、その頃の
私はガズミという花をよく知らず、網など使
わずとも手掴みできるような低木だと知りまし
た。マツシタトラは簡単に見つかりましたと思
いきや、それはよく似たトガリバアカネトラであ
ることがほとんどでしたが、その後は本物にも少
なからず出会えました。

これは大分前の話で、最近の高尾山の花の状態
はどうでしょうか？ 最近全国的にガズミが
減っているという情報もあり気になりますが、ガ
ズミの花上でマツシタトラやフタコブルリ等が
群れる光景を見たいものです。

(撮影・文松島 孝)



高尾山報助成金志納者
御芳名(順不同・敬称略)

熊谷市	吉野	六雄
深谷市	武井	悦子
八王子市	高尾山とんとん	
	むかし語り部の会	
太田市	一ノ瀬	啓子
伊勢原市	佐々木	晋介
東大和市	中川	彰久
伊勢原市	つかもとみやげ店	
新座市	彰山	粧麗
小平市	関	道雄
八王子市	石井	忠明
足立区	中山	恵司
立川市	五十嵐	孔亘
甘楽郡	松井	靖江
世田谷区	大藪	貴彦
高尾山健康登山者	一同	

下記のQRコード
から高尾山薬王院
のホームページに
アクセスできます



高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 犬山秀康
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円